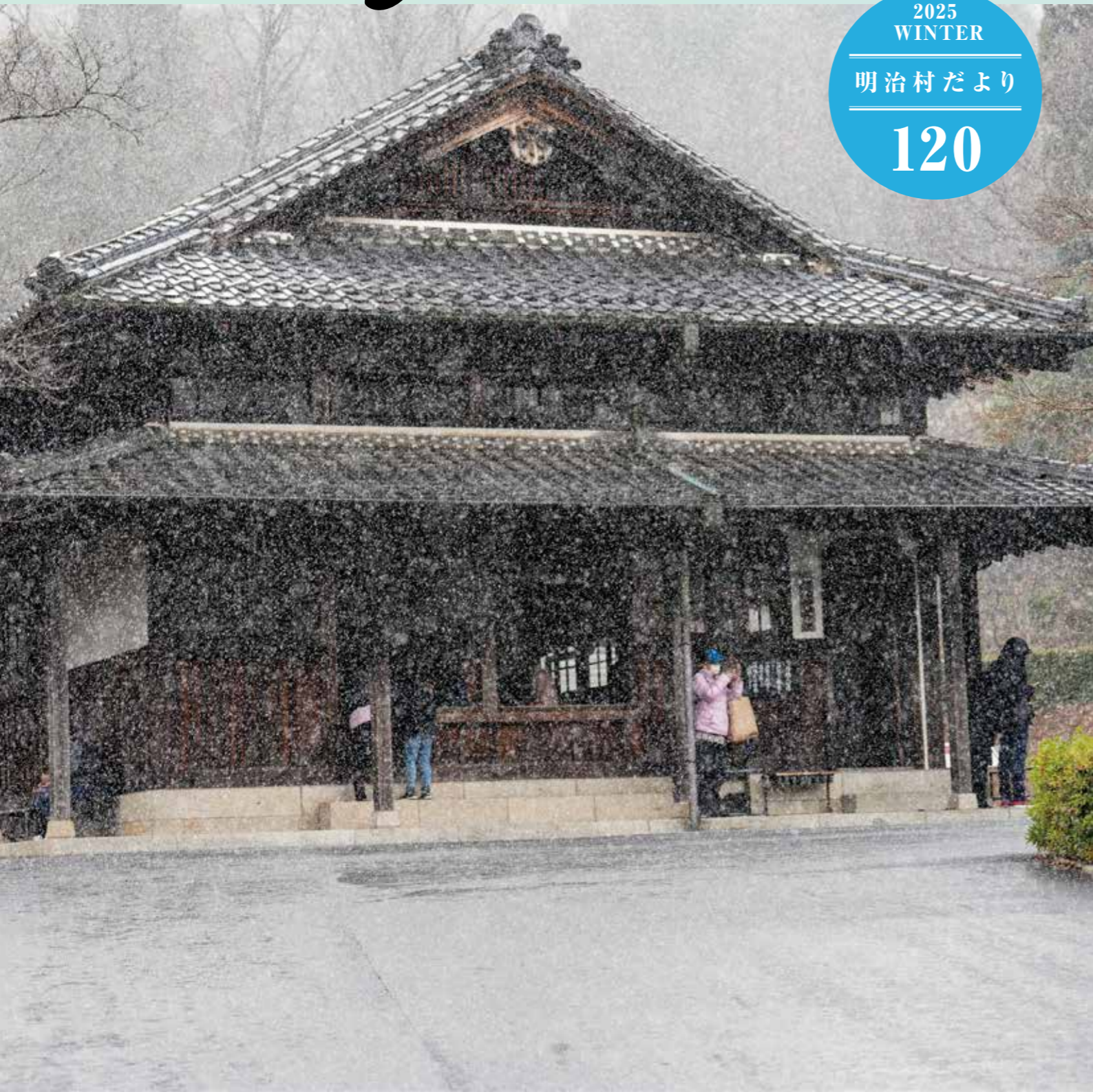


MEIJIMURA



2025
WINTER
明治村だより
120



明治村みらい基金

私たちの未来を豊かにする「明治」の価値
一緒に残し、伝えていきませんか

歴史的建造物を中心とした「明治時代からの贈り物」を未来へ残し続けるためには、多くの資金が必要です。明治村事業へのご支援をお願いします。

ご寄付の方法

明治村みらい基金へのご寄付は、以下の方法で行うことができます。

- ・クレジットカード ・金融機関からの振込
- ・ゆうちょ銀行からの払込

1回3,000円からご支援いただけます(マンスリーサポーターは月額1,000円から)
公益財団法人明治村へのご寄付は一定の「税制控除対象」となります。

詳しくは博物館明治村公式サイト内「明治村みらい基金」をご覧ください。



ご返礼の内容

ご支援額に応じて、感謝の気持ちを込めたご返礼をお届けいたします。

〈返礼品の例〉

【マンスリーサポーター】毎月メールマガジンを配信し、歴史的建造物や歴史資料の修理・保存をはじめとした明治村での様々な活動の様子をご報告いたします。

【年間3万円〜】明治村ペア入村券進呈 等

【年間10万円〜】現地での活動報告ツアーご招待(建築・学芸・乗物各担当がご案内する特別なツアー)、ご支援者さまの集いご招待(明治村みらい基金1年間の活動報告)、第二のふるさと住民票発行(1年間入村無料) 等

活動報告ツアーを実施しました

10月23日に乗物担当の活動報告ツアーを実施しました。蒸気機関車の走行日に行われる点火作業の一部をご案内し、明治村での動態展示を支える舞台裏を体感していただきました。



11月15日に学芸担当の活動報告ツアーを実施しました。西園寺公望別邸「坐漁荘」の特別ガイドと茶室「亦楽庵」での呈茶体験をお楽しみいただくとともに、歴史資料の維持・保存修理や展示に関する活動をご報告いたしました。



協賛会員

(令和7年11月1日現在)

敬称略:五十音順

ゴールド会員

(株)田中荘介商店

東明テクノロジー(株)

名鉄都市開発(株)

矢作建設工業(株)

一般会員

アイカ工業(株)
(株)安藤・間
因幡電機産業(株)
(株)NTTファシリティーズ
岡谷銅機(株)
麒麟ビバレッジ(株)
コクヨマーケティング(株)
佐藤工業(株)
(株)新高土木
ダイキン工業(株)
(株)竹中工務店
中設エンジ(株)
戸田建設(株)
名古屋レジデンシャル(株)
日本たばこ産業(株)
(株)長谷工コーポレーション
(株)不動テトラ
三菱商事(株)
名鉄エリアパートナーズ(株)
(株)リノテック

アサヒ飲料(株)
(株)磯部組
(株)魚津社寺工務店
NTP名古屋トヨペット(株)
(株)オノコム
(株)熊谷組
五洋建設(株)
(株)シーイーテック
スターツ東海(株)
大興建設(株)
(株)谷澤総合鑑定所
鉄建建設(株)
鳥谷尾建築研究所
(有)鍋野事務所
日本郵便(株)
(株)日立製作所
ホーチキ(株)
三菱電機(株)
(株)森本組
若松物産(株)

アサヒビール(株)
(株)伊藤園
NTT都市開発(株)
オーバースタイル(株)
鹿島建設(株)
(株)鴻池組
(資)斉木研磨工業所
柴山コンサルタント(株)
(株)スペース
大成建設(株)
(株)丹青社
東京海上日動火災保険(株)
(株)中島工務店
西松建設(株)
(有)ねこりす
(株)ファミリーマート
前田建設工業(株)
名高土木(株)
(株)ヤシマキザイ

厚見建設工業(株)
伊藤忠商事(株)
NTT西日本(株)
(株)大林組
(株)関電工
興和地所(株)
(株)ザイマックス
清水建設(株)
(株)扇港電機
(株)タカラレーベン
中京テレビ放送(株)
東洋電機製造(株)
中村耳鼻咽喉科(春日井)
日鉄興和不動産(株)
能美防災(株)
(株)フジタ
三井不動産(株)
名鉄EIエンジニア(株)
(株)LIXIL



「明治村だより」第120号(令和7年冬号) 令和7年12月22日発行

発行 博物館明治村

〒484-0000 愛知県犬山市宇内山1番地 電話 (0568)67-0314 <https://www.meijimura.com>

製作 大日本印刷株式会社

「明治村だより」第121号発行のお知らせ

発行時期 令和8年3月予定

「明治村だより」は、順次Webで公開させていただきます。詳しくは博物館明治村公式サイトをご覧ください。

※郵送サービスは終了いたしました。ご了承ください。

02 寄稿 焼津に於いての八雲滞在の家

04 明治村の建築に視る 日本近代青春群像物語(二十) 越境の雄飛と始原への遡行 —ブラジル移民住宅の佇いと細部—

06 MEIJIMURA TOPICS 07 A La Meiji-mura UPRIGHT IRON GRAND —産業革命が生んだ音色—

表紙について 令和6年度写真コンテスト入賞作品 木村裕親「バスを待つ」



写真1 小泉八雲避暑の家

焼津に於いての 八雲滞在の家

小泉八雲顕彰会副会長
坪井れい子



写真2 山口乙吉 ※



写真3 小泉八雲 出典:近代日本人の肖像

護せられ家人は此所に移住す。」

八 由来徴証、傳説

「家屋は、別紙添付に見取図(図1)の如く建築の年次不詳なるも明治中期以前の建造にして、土地家屋所有者は天野家。当時は山口乙吉氏(写真2)が借家して魚屋を営み小泉八雲先生(写真3)の滞在となったのである。此家は俗称御休町と称する此部落中唯一の二階建てのもので、其特徴は軒高が低く、階下階上共天井の高さが

畳面より六尺二、三寸に過ぎない。之は其当時堤防が低く、海風が荒い為めの此地方の風習を残して居るのである。

其後山口乙吉氏は其南筋向ひ側に建築して移転し家屋は先代天野市助に返換せられ現在は其相続人天野庄平が移住し海運業を営んで居る。」

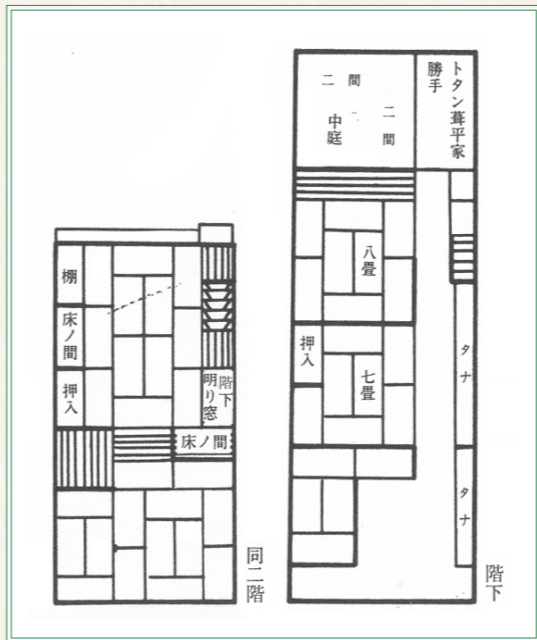


図1 小泉八雲先生滞在の家見取り図「小泉八雲と焼津」より上下反転

「八雲滞在の家」から 「小泉八雲避暑の家」へ

焼津では「八雲滞在の家」明治村では正式名「小泉八雲避暑の家」となっています(写真1)。「八雲滞在の家」は、昭和十一(一九三二)年頭頃に県の教育委員会に史蹟指定申請書が出されました。

史蹟指定申請書の七、八の項には、七 現状周囲の状況 破壊の程度等 「殆んど完全に其当時のまま保存せられ階下店舗の一部を其位置のまま床高を四、五寸上げたると、階段の位置を変更したるに止まる。南、北両隣は木造の家屋に接着せるも之も従来の形態なり、建物は完全に保



写真4 乙吉達磨



写真5 小泉八雲滞在の家跡(昭和45年1月建立) ※

ました。昭和四十三年九月十七日、解体が始まりました。昭和四十六年三月十八日、明治村開村六周年の記念行事として、「小泉八雲避暑の家」の竣工式が行われました。この家には、焼津からの物は、山口乙吉の家にあった達磨一個(写真6)、個人の贈呈による焼津笠三個です。

移転跡には、昭和四十五年一月三十一日「小泉八雲滞在の家跡」の記念碑(写真5)を小泉八雲顕彰会が竣工しました。

二 八雲と焼津

八雲の一回目の来焼は、明治三十(一八九七)年、四十七歳の時初めて焼津を訪れ、八月四日から十一日、新屋の「秋月楼」に一週間滞在。十一日から二週間、地元の魚屋・山口乙吉宅に初めて滞在(セツ夫人・長男・一雄・次男・養父・稲垣金十郎・女中ヨネ)。

八雲は、乙吉の開けっぴろげで、さっぱりした焼津気質、素朴さと実直さ、そして焼津の荒海を好み、以後、毎夏のように家族を連れ、乙吉宅に逗留しました。

八雲が焼津で取材した作品の主なもの、は「焼津にて」(一八九九「夜光幻想」(一九〇〇)「海辺」乙吉「だるま」「漂流」(一九〇二)等があります。昭和二十五年、小泉八雲生誕百年祭が焼津町、焼津文化協会共催で行われ、この時八雲文庫が、焼津町立図書館横に建設されました。八雲関連の図書その他に小泉家・山口家から寄贈・寄託された八雲関連の遺品二十点を展示。昭和五十七年、山口家より遺品類二十点が小泉八雲顕彰会に寄託されました。平成十九年六月、焼津小泉八雲記念館の開館と共に、遺品類も展示・保管されています(写真6)。

※青字は同行者 赤字は迎えや運れての合流

(一雄・光栄)。遅れて(セツ夫人・巖・新美女中)。

五回目 明治三十五年五月十二歳八月一カ月余(一雄・巖村)。迎え(セツ夫人・巖・女中)。

六回目 明治三十七年 五十四歳(一雄・巖新美)。迎えに(セツ夫人・清寿々子)と家族を連れて、六回の夏を焼津で過ごし、乙吉宅に滞在しました。セツ夫人も一回目は最初から、その後は五回の夏を迎えに来ています。

昭和二十五年、小泉八雲生誕百年祭が焼津町、焼津文化協会共催で行われ、この時八雲文庫が、焼津町立図書館横に建設されました。八雲関連の図書その他に小泉家・山口家から寄贈・寄託された八雲関連の遺品二十点を展示。昭和五十七年、山口家より遺品類二十点が小泉八雲顕彰会に寄託されました。平成十九年六月、焼津小泉八雲記念館の開館と共に、遺品類も展示・保管されています(写真6)。



写真6 焼津小泉八雲記念館 ※



写真7 記念館内部常設室 ※

参考文献

- 北山 宏明 一九八八年『小泉八雲と焼津』
- 小泉 一雄 一九三一年『父「八雲」を憶ふ』
- 小泉 時 小泉 凡共編 二〇〇八年『文学アルバム 小泉八雲』

※ 写真提供: 焼津小泉八雲記念館

「八雲小唄」

作詞:若杉雄三郎 作曲:吉田正

一、磯の千鳥よ 焼津の浜じゃ 鳴くな八雲がいるものを 知らぬ日本の面影を 訪ね訪ねて

二、あつい情の乙吉だるま せめて入れたや 両の目を 沖は大漁かかつお船 唄が流れる

三、波よ唄えよ 焼津の海は 八雲八雲と なるものを 青い海みりや 思い出す やさしいおもかげ ああ八雲恋しや夏まつり

「焼津おどり」

作詞:若杉雄三郎 作曲:中山晋平

二、焼津いとしやヨ 小泉八雲 片目達磨にヤレコロシヨノ 片目達磨に抱いて見せてる 大漁旗

大漁旗

オコシデヨ コリヤ メゴシデヨ

ヤンレ ヤリツク オマツチャナー

ハ ャットナー ャットナット

越境の雄飛と始原への逆行

—— ブラジル移民住宅の佇いと細部 ——

館長 中川武



写真1 ベランダ側からの外観全景

一 スペイン瓦葺 山村コテージ風の佇い

明治村四丁目の、入鹿池を望む岬状の突端にシアトル日系福音教会がある。その前を回りこむようにして池沿いに五丁目のほうに向かうと、赤い屋根のハワイ移民集会所が見え、そのすぐ向かいに、スペイン瓦葺の屋根で、木造の白い壁のいわゆるスパニッシュスタイルといふべきだろうが、それにしても少し地味な、しかし日本の民家とも違う、どこか異国風の佇いが漂う建物、ブラジル移民住宅（旧久保田家住宅）（写真2）が視えてくる（以下、旧久保田家住宅とする）。明治村の中のこの一帯は移民住宅村といえそうな場所である。

明治元（一八六八）年にイレギュラーな形で始まったハワイ移民、そして戊辰戦争の敗残から逃れた会津若松藩士数十名が明治二年にカリフォルニア州に入植したが、この時の若松コロニーは失敗したらしい。アメリカ本土への日系移民は明治中期から増加し、明治二十九年のシアトル航路の開港等もあり、明治末から大正期にかけて最盛期をむかえた。

ところが、二十世紀初頭よりハワイ、北米地



写真5 大正六年の旧久保田家住宅遠景



写真6 台所入口と二階への階段

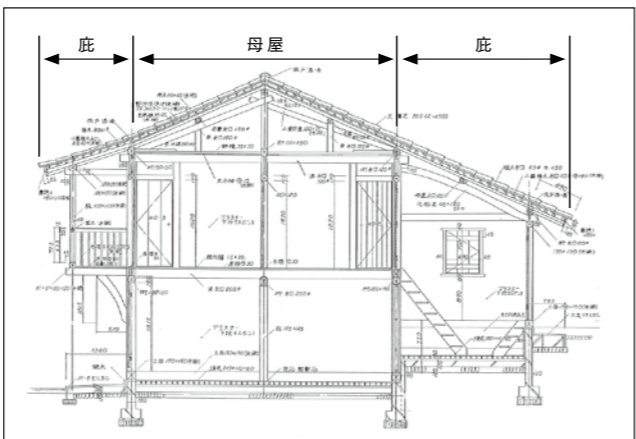


図1 梁行断面図

では分からない。しかし、断面図（図1）から推定するに、庇部分は野地板のない空葺きのスペイン瓦の一室空間の台所で、入口から梯子回りのみが古写真に残るレンガ敷きの土間へ六十cmほど降りる。台所から二階の居室へは、同じく梯子で一八〇cmほど登る（写真6）。構造計画は木造二階建て母屋庇一面切妻造、土台廻りの四

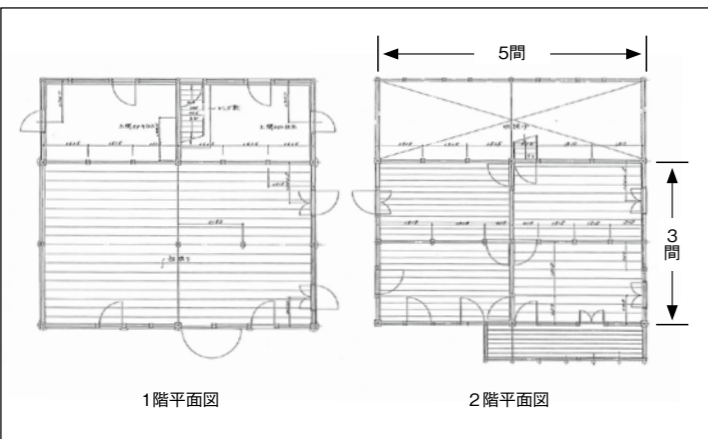


図2 各階平面図

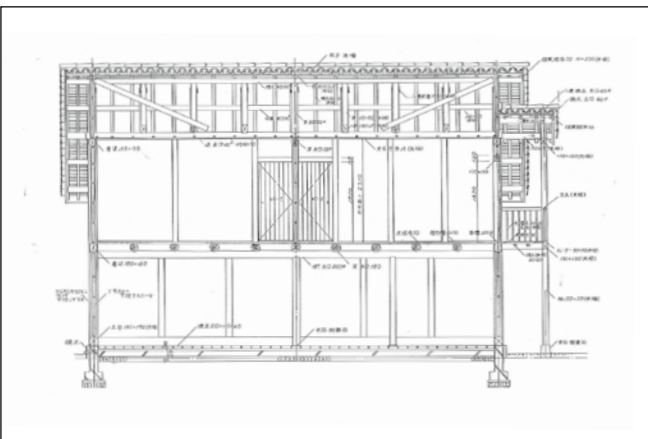


図3 桁行断面図

域への移民は制約を受けるようになり、ブラジル、ペルーなどの南米が注目されるようになった。特に明治四十一年、当時の移民は契約労働者と呼ばれ、民間会社をまきこんだ政府事業であり、ブラジルへ七八一名を移送した笠戸丸の出向風景を視ると今でも万感迫るものがある。大型船による南米への出航の別れともなれば、どんな場合でも悲喜劇がつきものであるろうが、笠戸丸の出航風景は、越境への雄飛の喜びの方が横溢しているように感じられる。

大正六（一九一七）年六月に、長野県出身の新婚の久保田安雄（二十三才）と定江（十七才）の若い夫婦は、サンパウロ近郊のレジストロに入植し、わずか三年目にこの住宅を建設している。棟梁大工の声掛けで二人の大工を集め、夫婦も共に働き、周辺の原始林からカナラという重硬な大材を切り出し、用材にしたという。ハワイやサンパウロなどの大きな日系人コミュニティがある場合、専門職人も入植して日本伝統的な寺院などがつくられていた。

現地産の用材カナラは現在、伐採禁止となっており、今回の修理に当たって取替え材として、同様の風合いと重硬さをもつ東南アジア産のセラガンバツが用いられている。通し柱や



写真2 新

写真3 はつり痕



写真4 柱の根継ぎ

扉板は新（写真5）はつりが施された（写真3）当初材が再用されており、柱の根継材や取替え材もそれを踏襲し（写真4）、ラフな柱間計画や開口部の板扉などが古写真から忠実に復原されている。これらが融合されて異国風、プリミティブさ、洗練とはまた違うある種の確かな存在感のようなものがその佇いから窺えるように思われる。

二 平・断面計画の不思議

この旧久保田家住宅が立地していた敷地の様子は建設間もなくの部分的な様子ではうかがえる（写真5）ものの残念ながら具体的な地形ま



写真7 床敷板の新はつり痕



写真8 一階納屋

して生まれたのか、である。

ブラジル移民の当初は、大農場主の大プランテーション農場は奴隷労働に支えられていたような環境が残っており、移民はレンガ造の閉鎖的な狭い住戸に押し込められていた（写真9）。久保田夫妻が入植した時代は、自主独立農民の時代であり、頑張りや才覚さえあれば入植三年目にして、若くても自身の土地と住宅、作業場を持つことができたのである。久保田夫妻は長野県出身である。彼らの出身階級は判明しないが、江戸後期から明治時代の長野は、地域的にも、階級的にも広く四つ間型民家形式



写真9 邦人が入居したコロニアルと呼ばれる住宅

が定着していた。これは、かつて土間以外の上居室部が田の字型に畳敷の部屋が四つに台所と作業場を兼ねた広い締め固められたたき土間が付設されたものであった。久

一階の納屋（写真8）は創建当初には板敷であったが、土足で出入りできる展示室とするために移築時にレンガ敷に変更されている。ブラジル移民事業や、移民たちが原始林の開墾に用いた製材工具などを展示している。台所と納屋の床面への段差は敷地の地形からきていると考えられ、創建当初はこの両者は遮断されていたが、現在は見学のために間仕切り壁の一間分が開けられている。

以上の平・断面計画から考えられることは、台所と居室という生活部分は直接連結させているが、二階ベランダから望む、例えばコーヒー農園側は、多様な農作業に関わる農機具や作物の出し入れのために、一間幅両開き板扉が設けられている。

問題はこのような平・断面形式がどのように

A La Meiji-mura

UPRIGHT IRON GRAND — 産業革命が生んだ音色 —



3丁目68番地 芝川又右衛門邸

この高いメーカーであったことがうかがえます。しかし、二十世紀半ばにJ・B・クラマー社(J.B. Cramer and Company)に買取され、一九六七年には同社をケンブル社(Kemble Piano)が買取しています。一九八〇年代前半まではJ・B & S社の名は残っていたものの、その後市場

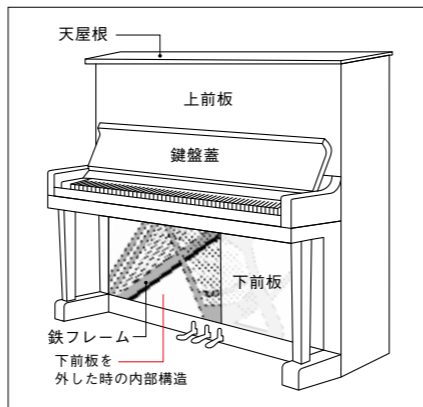


図1 一般的なアップライトの構造



写真5 金色の鉄製フレーム



写真6 下前板をはずした状態

明治村のいくつかの建物にピアノが展示してあることはご存知でしょうか。今回ご紹介するのは、芝川又右衛門邸にあるアップライトピアノです。

このピアノは、江戸時代から続く名古屋の旧家から寄贈されたもので、大正初期に購入されたという記録が残ります。イギリスの「ジョン・プリンスミード・アンド・サンズ(John Brinsmead & Sons Ltd)」(以下、J・B & S社)で製作されたもので、鍵盤蓋の内側に同社のロゴを確認できます(写真1)。J・B & S社は一八三七年にジョン・プリンスミードによりロンドンで「ジョン・プリンスミード」として設立され、一八六一年には二人の息子エドガー(Edgar)とジョン(John, Jr.)が参画し、前述の社名となりました。同社は多くの博覧会で受賞を重ねており、実際に天屋根を開けた内部には受賞メダルが確認でき(写真2)、評



写真1 社名ロゴ



写真2 受賞メダル



写真3 製造番号



写真4 UPRIGHT IRON GRANDの銘

から姿を消しました。このピアノは、下前板の内側に「33479」と製造番号と思われる数字があり(写真3)、これにより一八八五―一八九〇年の間に製作されたことがわかります(註1)。そして最大の特徴は「UPRIGHT IRON GRAND」と銘打たれている点です(写真4)。J・B & S社のカタログには明治村のものと同様に一致するモデルはないものの、同名のアップライトピアノが掲載

されており、「Full Iron Frame」すなわちフレーム(図1)が全て鉄でできていることを示しています。また一八九四年の新聞記事では、J・B & S社の「upright iron piano」について、音がより美しく響くよう鉄フレームの繋ぎ目を一つに抑えた設計がなされていると紹介しています(註3)。明治村のピアノが同じ内部構造かは定かではありませんが、実際に金色の鉄フレームを確認でき、前板は中央部分が開いて内部構造を見られるようになって(写真5、6)いるのです(写真5、6)。

こうした鉄フレームを用いたピアノの登場は、産業革命による工業技術の発展に支えられていました。十八世紀末までのピアノは木製フレームでしたが、演奏の力強さや音量が求められるようになると、木では弦の張力に耐えきれなくな

りました。十九世紀に入り産業革命のことで鉄の大量生産と加工技術が進むと、鑄鉄製フレームが発明・採用されるようになります。これにより弦の張力は格段に高まり、豊かで力強い音色が実現しました。ピアノはそれまでの手工芸的な楽器から、鉄と機械の力を取り込んだ「工業製品」へと進化し、やがてアップライトピアノの登場により家庭にも広く普及していきます。「UPRIGHT IRON GRAND」という名称は、まさにこの時代の技術革新を象徴するものといえるでしょう。

註1 参考文献(2)より
註2 Iron frame having but one break, which enables the waves of sound, after the string has been struck, to have uninterrupted play on the sound board, producing a tone which is simply charming.『The Mercury』一八九四年十二月二十日

参考文献
(1) ジョン・ポール・ウィリアムズ 二〇一六年『ピアノ図鑑 歴史・構造・世界の銘器』株式会社ヤマハミュージックメディア
(2) Bob Pierce 二〇一三年『PIERCE PIANO ATLAS』Leap Enterprises
(3) 岡田暁生 二〇一五年『工業製品としてのピアノの歴史 ― 木の箱から鋼鉄マシンへ ―』生産研究(七七三) 東京大学生産技術研究所
(4) Brinsmead & Sons 一九一六年 John Brinsmead & Sons Catalog
(5) 『The Mercury』一八九四年十二月二十日

保田夫妻は、この住宅が明治村に移築される時、手塩にかけた娘を故郷に嫁に出す気持があると述懐しておられる。想像を逞しくすれば、子どもの頃からのふるさとの、四つ間型民家で育った記憶がブラジルの地で甦った可能性もあるのではないだろうか。

三 新はつり痕の細部が語る

旧久保田家住宅は、母屋と庇の構法であること、母屋には野地板と天井、庇には野地板も天井もない空葺きであること、母屋の小屋組が、大梁と束柱立ての和小屋、そして尺貫法の寸法計画であることから、確かに日本の伝統的大工技術を主体にして建てられたものだといえるのである。

しかし、日本の特定の時代と環境にしかないような、例えば、庇部分の瓦葺き建物は東南アジアの各地、各時代で見ることが出来る。柱や板の表面の新はつり痕はどうだろうか。

木造建築の歴史が豊富な日本では、板を製材する縦挽きのこぎりや表面を滑らかに仕上げの台鉋が普及していなかった古代や新しい時代でも山村などでは、木材の表面仕上げは、せいぜい新はつりであった。

十九世紀初め頃のブラジルの開拓地では、鉋に類似した工具が代用されていたに違いない。日本の原始住居である竪穴住居は、土間の石製炉で煮炊きし、雑木を石器で加工した木材でシエルトとしたものであった。

旧久保田家住宅は、ブラジルという遠隔地から、というだけでなく、その土地が持つ生産技術や文化の歴史的時間から現代の日本へやってきたものである。移民という越境により未知の未来的世界の可能性に雄飛すること、そし

て、それとはうらはらに、途上国ゆえの原始性の時間の中に否応なく取り込まれてしまうこと、つまり時間的な遡行が避けられないことである。

言い換えれば、部分的にはあるが、移民住宅の本国への移築復原は、住宅史における時間的、空間的な内延と外延の表象であるともいえるのである。

四 二階ベランダのある風景

久保田夫妻は早くも入植三年目には、以前のコーヒー農園契約労働者住宅とはうってかわった木造の開放的な住宅をつくった。

日本の伝統的な木造住宅は柱間が明かり障子建具により開閉できる開放的なイメージがあるが、それは上流階級であって、中・下層の庶民住宅は時代が遡行するほど、土壁が多く、開口部は小さく板で閉じられるばかりで閉鎖的なものが多かったのである。

旧久保田家住宅は建設当初より二階木造ベランダが設置されていた。幼児とともに誇らしげに盛装した若き久保田夫妻の家族写真には、背後に、農園前の庭園と住宅がひかえている。住宅には確かに二階ベランダがあったが、創建当初には二階へ上る外階段がついていないこともわかる。しかし、時期は分からないが昭和四十九(一九七四)年の解体以前にベランダに出ることができる部屋への外階段が付いたことが判明している。このことは、外から直接居室へというアプローチが可能になっただけではない。

もしかしたら家族以外の関係者も含めて、二階ベランダから開墾された広大な農園風景を眺めていたのかもしれない。一つの夢の実現であった。

MEIJIMURA TOPICS ▶ 2025.10-12

11/11 開村60周年特別対談 「今に息づく明治の皇室文化」を開催

彬子女王殿下をお招きし、阿川佐和子村長との特別対談を開催しました。特別対談では、宮中の装いや洋装化について「和服が一種の見世物となっている、と外遊の際に伊藤博文らが感じ、昭憲皇太后が洋装に変えたことに始まっている」とのお話を頂戴しました。それに先立ち、開村60周年記念特別展「時代の扉をひらいた装い」をご覧になり、昭憲皇太后や、貞明皇后が着用されたドレスなどの展示資料を鑑賞されました。



10/11~12/7 開村60周年記念特別展 「時代の扉をひらいた装い」

千早赤阪小学校講堂にて、昭憲皇太后をはじめとする女性たちが、明治宮殿での儀式や行事で着用したドレスを、ドレスが着用された宮殿で使用された家具調度品とともに展示しました。また、入場チケットは、展示したドレスをもとに2種類作成しました。



11/1~3 燈台記念日特別企画 「品川燈台」特別公開・関連イベントを開催

11/1の「燈台記念日」に合わせて、品川燈台の内部を公開しました。また、菅島燈台附属官舎前では第四管区海上保安本部による「灯台の歴史展示」の開催や、中日海洋少年団による手旗信号の実演を札幌電話交換局前と菅島燈台附属官舎前で披露し、イベントを盛り上げました。



10/11~12/7 新宿区立漱石山房記念館に資料を貸出

10/11~12/7まで開催された新宿区立漱石山房記念館の《特別展》「発表120年記念『吾輩ハ猫デアル』」に資料を貸出しました。

11/1~16 特別公開「儀装車」を開催

皇室の特別な儀式の際に使用される「儀装車」を公開しました。昨年に引き続き、片側の扉を開け、内部をご覧いただけるようにしました。